

「健康寿命」テーマ 弘大などシンポ

研究成果「全国、世界へ」

中路特任教授 新たな方向性示す



基調講演し「世界展開」を掲げた中路特任教授

弘前大学、県、弘前市は4日、同大を拠点に進める健康寿命の増進プロジェクトをテーマとし、オンラインでの全国規模のシンポジウムを開いた。研究を統括する同大大学院医学研究科の中路重之特任教授は「『短命県返上』に向けた成果を基盤に全国、世界に展開していく」と述べ、プロジェクトの新たな方向性を示した。（福士和久）

シンポジウム「ヘルシーエイジング・イノベーションサミット」は、同市のアットホテル弘前シティを主会場に、全国の研究機関や企業から約1,300人がリモートで参加。文部科学省の大型研究プログラム「COI（センター・オブ・イノベーション）ストリーム」の認定期間が本年度で最後になることを受け、9年間にわたる取り組みを約4時間半にわたって総括した。弘大COIは「岩木健康

増進プロジェクト健診」や「いきいき健診」で得たビッグデータの解析で、疾患発症の人工知能（AI）予測モデルや新しい健診「QOL健診」モデルを開発するなど成果を挙げた。中路氏は次の目標として、膨大な臨床データと個人データを組み合わせる取り組みにより、「世界的に健康格差をなくしていきたい」と抱負を語った。この他、味の素の西井孝明社長、料理研究家の浜内千波氏、COIのビジョンや事業全体の方針を決めたCOIストリームガバニータ。プロジェクトの進捗を報告し、特別講演し、プロジェクトに携わった研究者たちが成果と今後の課題を報告した。